

# 奈良県出土の和同開珎

田中 大介

## はじめに

今回、奈良県内における和同開珎出土事例の集成を行った結果、231 事例・2449 枚（銀銭含む）以上を数えることができた。これは 2000 年に行われた出土銭貨研究会第 7 回研究大会における集成〔出土銭貨研究会 2000〕の 175 事例・1967 枚に 500 枚ほど追加する結果になった<sup>(1)</sup>。

これらの事例に対して、個々に検討を加えることは筆者の能力を超えるため、以下本論では、まず遺構ごとの出土数についての大まかな検討を、平城宮・京・藤原京・その他都城以外、の各地域ごとに行い、次いで、今回集成を行った中で、特に研究史的に注目されると思われた事例について幾つかとりあげることで任を遂げたいと思う。

## 1. 各地域における遺構別出土数の傾向

本節では、各地域における出土数について、出土遺構別にその傾向を捉えてみたい。（次表参照）

### ①平城宮

平城宮内<sup>(2)</sup>からは 323 枚の和同開珎が出土をした。その内、9 割近くの 287 枚（88.9%）は、溝からの出土である。平城京域内における出土事例においても、溝からの出土事例は多いが、数量的には全体の半数程度であり、宮内における溝出土の割合の高さは特筆に値する。さらに、この溝出土のうち 7 割が、宮の第二次大極殿院・内裏地区と東方官衙地区の間を南北に貫流する基幹排水路 SD2700、いわゆる「東大溝」からの出土（番号 6～10）である（図 1）。また、その他についても東方官衙地区や式部省東方官衙地区など、宮の東方に出土例が多く見られる。

この出土事例の偏りがどのような背景のもとに生じたかについては、平城宮内の諸施設の具体的な解明を待たなければならない。東大溝からの銭貨の出土は、昭和初年にこの溝を最初に調査した岸熊吉氏によって、祭祀に伴う祓えの行為が想定されているが〔岸 1934〕、その後の調査でも銭貨が木製祭祀具と伴出する傾向が認められ、宮内での銭貨の祭祀的使用法を示す可能性がある。なお、東大溝からは、和同開珎のバリ銭と鑄棹が出土しており、宮内での鑄銭を示唆するが、周辺からは鑄造工房などの発見がなく、その性格を明らかにしがたい。

### ②平城京

平城京内からの出土数は 1340 枚で、奈良県内全体の半数がこの地域からの出土であることが確認できる。うち、最も出土数の多い遺構は溝の 644 枚（48.0%）で、次いで土坑の 307 枚（22.9%）、

建物跡（ただし、寺院関係の建物敷地内における土坑出土例を含む）の214枚（16.0%）、井戸の79枚（5.9%）と続く。但し、土坑出土事例は、長屋王邸の左京三条二坊七・八坪境におけるSK4355（番号65）と、左京四条四坊九坪のSK2408（番号85）から、緡銭状態で出土した和同開珎、計199枚を含んでおり、この特異な大量出土を除外すれば108枚（8.1%）となる。

溝出土事例について検討すると、まず条坊の大路側溝<sup>(3)</sup>と、それ以外の条坊の中間路・小路を比較すると、大路側溝が281枚、それ以外が228枚となり、約4:3でやや大路が多い。しかし右京に限定すると、大路側溝が36枚、その他が121枚と、大路側溝出土例が減少する。条坊の中間路の中でも、大路と同レベルの幅を有し、宮城門にとりつく東西一坊々間路と、一条・二条々間路を大路として取り扱うと、その数は「大路」が412枚、その他が97枚となり、圧倒的に「大路」出土が多数を占めることになり、右京も129枚:28枚と大路が上回る。

京内の条坊側溝は祓えなどの祭祀に使用されており、銭貨も祭祀遺物と共伴する例が多い。そうした祭祀が大路を中心に行われたことが推測されるが、通行者の落とし物の可能性も捨てきれず、出土量の多寡は通行量と関連する可能性も残る。今後、個別の出土遺構について共伴遺物の検討作業が必要となろう。

また市との関連では、東堀河からの出土が108枚（番号84・99・103・105・107、図2）と、溝出土数の1/6を占めることも興味深い。無論、貫通している東市の存在も考慮しなければならないが、東市の北方の流路からも出土していることを重視すれば、舟運による多量の物品輸送と、それに伴う銭貨の移動を想定することも可能である。東堀河からは祭祀遺物の出土量も多く、通行量（輸送量）と出土銭貨量が対応するのか、出土銭貨を祭祀との関連で理解すべきか、側溝と同様の問題が残る。

建築遺構出土事例については、ほとんどが寺院関係からの出土であり、一般の住宅建築からの出土事例は稀少である。寺院関係以外は廂付きの掘立柱建物からの出土が3例、総柱建物が1例と、大型建物からの出土が目につく（図3）。

井戸出土事例については、左京が35枚、右京が44枚を数える。これを遺構数で数えると、左京が11例、右京が30例となり、右京域に多い傾向が認められ、右京二条三坊周辺に集中する。井戸からの銭貨の出土は、井戸の開削や廃絶時における、祭祀行為とみられるが、一部地域に集中して見られることは興味深い。

また、井戸からの出土は通常1～5枚程度であるが、和同開珎の種銭を出土した左京三条二坊の井戸SE4580（番号60、図4）からは、和同開珎24枚を含む銭貨39枚が出土しており、最多の出土量を誇る。種銭の出土理由も含め、井戸の性格の検討が課題となろう。

土坑出土事例については、緡銭状態での出土事例を除外すると、大半が土器の中に銭貨を納めて埋納した土器埋納遺構からの出土である。これには地鎮具や胞衣壺があり、個別の遺構ごとに両者を峻別する研究も進んでいる。

### ③ 藤原京

藤原京域内からは56枚が出土しているが、ほとんどが藤原京廃絶後の奈良時代からの出土例

である。遺構別に見ると、井戸からの出土（29 枚、51.8%）が際立つが、後述するように一括出土であるために、全体的にはさほど顕著な出土傾向はないと考えられる。

全体のうち約半数が左京六条三坊(番号 156、図 5)の井戸 SE4740 からの出土（27 枚）である。「香山」墨書土器を伴出しており、奈良時代の大和国香山正倉に関連する遺構と推測されている。土坑出土事例は火葬墓と考えられている上ノ井出遺跡(番号 163)の出土品のみである。

#### ④都城以外

上記①～③以外の地域からの出土数は、730 枚を数えるが、不時発見や採集品が多く、正確な数についても不明な点が多い。

地域的に見ると、奈良盆地内からは、溝（河川跡）や火葬墓・井戸などの多様な遺構からの出土例が見られるのに対して、盆地周辺の山裾部、および大和高原内の都祁・長谷地域では火葬墓や古墳石室を利用した追葬の事例が大半を占める。東部は榛原や室生大野など、初期東海道沿いに数点みられ、南の山岳部では寺院関係のみの出土となる。

注目される事例としては、都祁地域に近い大柳生ヒロタ遺跡(番号 217、図 6)で、土器埋納遺構が確認されている。遺跡は、門が取り付く柵列や掘立柱建物群が存在し、官衙的な様相を示す。都城以外の土器埋納遺構からの出土例としては、この他に法隆寺の西院伽藍に伴う地鎮遺構があるにすぎない。

## 2. 個別事例（文献については集成表参照）

### ① 左京三条二坊八坪（長屋王邸）SD4750 出土和同開珎(番号 66、図 7)

SD4750 は、八坪東南端に位置する幅 2.8～3.7m、深 0.8～1.0m、全長 27.3m の溝状の土坑で、いわゆる「長屋王家木簡」の出土した遺構として知られる。木簡群は 4 層からなる土層の上から 3 層目から出土をしたが、この木簡群と共に和同開珎 1 枚が出土し、また 2 層目の暗褐粘土層からも 1 枚出土している。

SD4750 と長屋王家木簡との関係については、木簡内容の調査の結果、削屑を含め、土坑の北側に付札類、南側に文書類が多いという傾向が見られることから、複数回・長期間にわたり投棄されたのではなく、単独の長屋王家の家政機関（「ツカサドコロ」）が、短期間に一括して木簡を廃棄したこと、また、木簡の年記が和銅 7 (714) 年をピークに和銅 3 (710)～靈龜 3 (717) 年の時期に収まる（1 点のみ大宝 3 (703) 年）こと、1～3 層から出土した土器・瓦も同様の年代に収まることなどから、木簡群は靈龜 3 年をさほど過ぎない時期において一括して廃棄され、程なく埋められたものと推測されている。

以上のような木簡群と共に出土した和同開珎も、同様に靈龜 3 年に近い時期に埋没したものと理解できることになる。換言すると、和銅元～靈龜 3 年頃の約 9 年間に、生産され流通した和同開珎である可能性が高い。管見の限り、和同開珎の流通の初期段階、和銅～養老の年代を押さえられるのは、この事例と、若干の問題を残すが興福寺中金堂出土品だけであろうと思われる。

## ② 東大寺天地院出土和同開珎(番号 175、図 8)

二月堂の東北に位置する「丸山」地域の発掘調査により、3間×3間の塔跡が検出され、報告書ではこれを『東大寺要録』などに見られる「天地院」跡と推定している。天地院は行基創建の仏教施設と伝えられ、和銅元年に発願がなされ、翌2年に完成したと伝えられる。和同開珎は塔跡柱穴の根石埋土中より2枚出土している。根石は創建時の位置を留めているとされることから、「和同開珎の埋納時期が創建当時に遡る可能性もある」とされている。もし和銅2年完成の伝承が事実であるとすれば、出土した和同開珎は、まさしく和同開珎発行直後のものということになる。

調査報告書は、天地院の行基和銅元年創建伝承について、「天地院を和銅元年に行基が創建したとの縁起は事実である可能性が高い」とする。その理由としては、出土した土器の年代が、平城Ⅰ～Ⅱ期と9世紀以降となり、諸文献の伝える天地院の活動時期と重なること、そして、「行基年譜」などが伝える行基の活動を追うと、和泉地域での活動は和銅2～神亀元年までが空白期であり、摂津は天平2年以降からであることから、和銅2～神亀元年においては大和・河内国で活動していたとみなされること、さらに、行基建立の寺院を記した「天平十三年記」に天地院が見られないことについては、行基の活動を咎めた為政者側により、東大寺を見おろす山中に位置する天地院と行基との関係を断ち切ろうとする意図が働いたため、と考える。

塔跡が天地院であることについては異論は無いが、行基による和銅元年創建の伝承を認めることについては、報告書の考察ではいまだ推論の域を出ていないと思われる。行基の和銅元・2年における行動の綿密な考察や、東大寺創建以前の、同地での造寺活動などの究明がさらに必要であろう。しかしながら、もしも天地院の和銅元年創建説が確かなものとなれば、初期貨幣研究において和銅元年発行の和同開珎を識別する上で重要な資料となろう。

## ③ 桜井市上之宮遺跡出土和同開珎(番号 212、図 9)

上之宮遺跡は奈良盆地の東南に位置する小台地上に存在する遺跡で、導水施設と苑池遺構を伴う、6～7世紀の豪族居宅跡が検出され、聖徳太子の上宮との関係が推測されたことで有名である。この遺跡から和同開珎30枚がまとまって出土した。石敷き遺構SX02を覆う黄灰色土の埋土(整地土)の中からの出土で、SX02の床石から約20cm浮いている。報告書によればこの埋土と周辺の遺構との関係は、

- 1) まずSX02と、それに取り付く溝SD02や、SD02の西方に流れるSD01が設置され、
- 2) のち、遺跡全体において山土の黄灰色土によって整地がなされ、
- 3) 整地ののち、SD01の流路と鋭角に交差する形で、SD03が整地土上に開削される。

という変遷を辿る。和同開珎の年代は、遺構の重複関係の上では、SX02とSD01・02の廃絶後、SD03の開削までの間の時期に位置づけられる。

ここで問題となるのはSD03の時期である。報告書によれば、SD03からの土器の出土量は少量であるが、TK217に近い須恵器など7世紀後半代のものだけであり、奈良時代の土器が見られないとされる。つまり、遺構・遺物の上では、出土した和同開珎は奈良時代以前のもの、というこ

とになる。

報告書ではこの点について、「黄灰色土内から、和同開珎が 30 枚し、奈良時代に整地していると判断したが、溝内出土の少量の土器からは TK217 に近い須恵器坏が出土しており、それ以降のものがみられないため、和同開珎と石敷溝 03 との関係が今となつては不明である。」「(和同開珎は) SX02 とは関係なく、SD03 に共伴する遺物と考えたが、SD03 も遺物的には 7 世紀後半頃の土器しか出土しておらず、伴うのかそれ以後かは不明。」と、SD03 と和同開珎の年代の逆転を説明しきれずにいる。出土した和同開珎はすべて隸開の新和同銅銭であり、7 世紀に遡ると見ることは難しい。

いずれにせよ、和同開珎の年代観と密接に関わる遺構の年代観であり、当時の出土状況や遺構変遷、遺構の年代観の再検討が求められる事例である。

#### ④ 奈良市鹿野園町出土銭(番号 181、図 10)

1910 年、耕作中に発見されたと伝えるものである。8 世紀中葉の有蓋の須恵器壺の中から和同開珎 201 枚(203 枚とも)が発見され、一括して大阪の古銭商、下問寅之助に買い取られた。のちに下問より黒川幸七へと売却され、現在、壺と和同開珎 150 枚が黒川古文化研究所に保管されている。

100 枚を超える出土事例については、今回の集成においては都城の溝や、緡銭での土坑出土例を除けば、寺院出土例に限定される。しかしながら現在までに、当該地域に古代寺院が存在した形跡はない。むしろ奈良盆地の周辺域であり、埋納された壺の形態などから蔵骨器である可能性が高いが、中に納められた銭貨の数量が異常である。これが地方での出土であれば、有勢な地域豪族による蓄銭と考えることも可能であろうが、銭貨流通の中心地域である大和国で死蔵されたとは考えにくい。とりあえず本論ではこの事例を火葬墓関連として考えた。200 枚という数量については、例えば小治田安萬呂墓(番号 220)からは和同開珎銀銭 10 枚が出土し、周辺からさらに多くの銀銭が出土したという伝承を考慮すれば、銅銭 200 枚というのもあながち無理な数量ではなかろう。

#### ⑤ 當麻町(現：葛城市)染野出土和同開珎銀銭(番号 204、図 11)

栄原永遠氏、及び出土銭貨研究会による集成で、當麻町域内より 2 枚の和同開珎銀銭が出土した、とされる〔栄原 1993、出土銭貨研究会 2000〕。栄原氏の集成表は、「山口神社鳥居南斜面」より和同開珎銀銭が 1 枚と、「北葛城郡当麻町染野」より同じく銀銭が数量不明で出土とし、その出典文献として前者は『当麻村誌』(当麻村教育委員会、1956 年)の「和同開珎の出土」項を、後者は同文献と、樞原考古学研究所編『奈良県遺跡地図』2(奈良県教育委員会、1971 年)をあげている。(出土銭貨研究会による集成も同様であるが、出典は『当麻村誌』のみである。)

『当麻村誌』の「和同開珎の出土」項においては、「近年」において山口神社石鳥居の南斜面より、開墾中に和同開珎銀銭が出土したことが記されているが、その他、同じ染野地区より和同開珎が出土したことについては記載されておらず、『当麻村誌』の他の文章内においても見られ

なかった。ただし、『奈良県遺跡地図』には、當麻町加守に位置する新宮原古墳の南から、和同開珎銀錢が出土したと記されており、「北葛城郡当麻町染野」は、この地点を指していると思われる。また、『当麻村誌』を改定した『当麻町史』（当麻町教育委員会、1976年）内の「当麻町の遺跡分布図」「当麻町遺跡地名表」にも、『奈良県遺跡地図』と同位置より、「和銅銀錢」が出土すると記される。（なお、栄原氏の集成における染野出土事例の備考には「戦時中に出土」と記されるが、その出典を見つけることはできなかった。）

結論から言えば、この「山口神社石鳥居南斜面」出土品と、「北葛城郡当麻町染野」出土品は、同一ものと考えられる。なぜならば、『奈良県遺跡地図』に示される銀錢出土地（＝「北葛城郡当麻町染野」）の北方に、石製の鳥居が今でも存在しており、その出土地を「石鳥居南斜面」と呼称することも可能だからである。この鳥居自体には山口神社の名が記されていないが、その建つ東西方向の道路は、西へ向かえば南折して当麻山口神社へと続いており、また近隣に対応する神社が存在しないことから、山口神社の鳥居と考えて良いだろう。そして、山口神社近辺で、鳥居の南が斜面となり、畑地となっている場所というのは、地図上においても、また現地を視察した中でも、この地点以外に相当する場所は無いと思われる。

奈良県から出土する和同開珎銀錢の事例は芝田悟氏の集成〔芝田 2004〕によれば9事例23枚（染野出土事例は数量不明のため除外される）で、今回追加された藤原京右京十一条一坊東南・西南坪（番号169）の1枚を加えてもさほど多いという状況ではないため、不時発見かつ現在所在不明品ではあるが、あえて一考を試みた。

〔付記〕 本稿は研究集会にて行った報告内容を、当日における参加者からのご指摘を受け、大幅に内容の改変を行った。研究集会参加者の方々に対してはお詫びと謝意を申し上げたい。また、本稿を纏めるに当たり、松村恵司氏より懇切なご指導を戴いた。改めて感謝の意を記したい。

## 〔注〕

(1) なお、今回の集成作業においては、同一地域における複数回の発掘調査について、各個にとりあげた

め、山川集成とは事例数に関して正確な比較はできない。一例として、出土銭貨研究会の集成では平城京左京三条二坊一・二・七・八坪の、いわゆる長屋王邸出土事例について、奈良国立文化財研究所による正報告書〔奈良国立文化財研究所 1995〕をもとに一括して計上しているが、今回の集成では奈文研による各次数の調査を別個に取り扱ったため、事例数が増加をしている。

(2) 平城宮内・宮外の区別は、原則として宮城大垣を境として、その内外で区別をした。ただ、大垣下をく

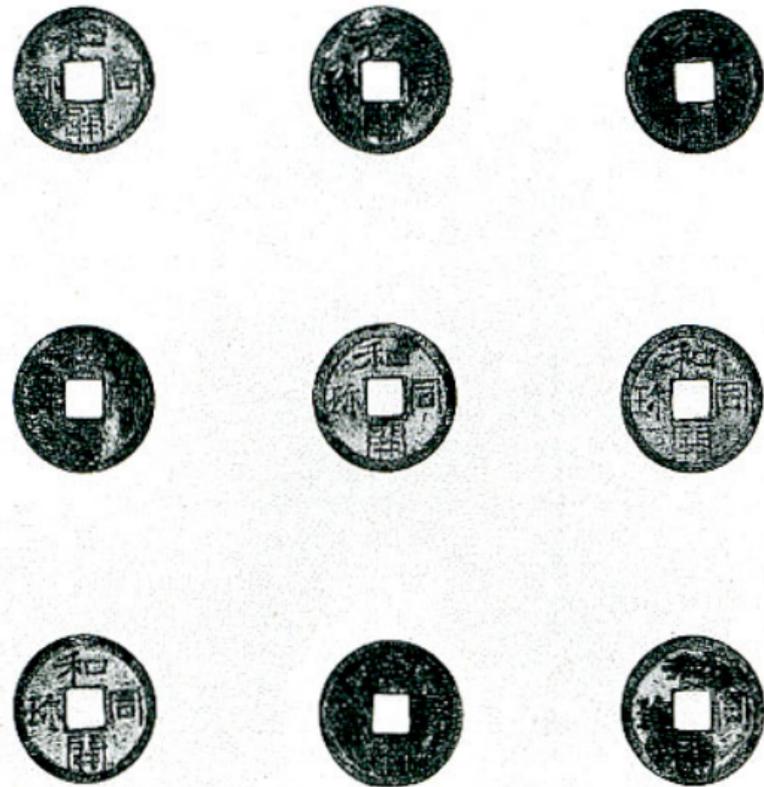
ぐる暗渠などからの出土事例など、判別に窮する事例も存在するため、あくまで便宜的な数値である。

(3) 二条大路の東二坊域に存在した、SD5100・5300（いわゆる「二条大路木簡」出土遺構）については、二条大路の側溝として機能したというよりは、短期間のみ開削されていたごみ捨てのための穴、という

位置づけがなされているため、道路側溝には含めなかった。

## 〔参考文献・図版出典〕

- 橿原考古学研究所 1998 『奈良県遺跡調査概報 1997年度（第一分冊）』。
- 岸 熊吉 1934 「平城宮遺溝及び遺物の調査報告」、『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第十二冊、奈良県。
- 黒川古文化研究所 1990 『黒川古文化研究所名品選』。
- 栄原永遠男 1993 「日本古代銭貨出土一覧表」、『日本古代銭貨流通史の研究』、塙書房。
- 桜井市教育委員会 1989 『阿倍丘陵遺跡群 一桜井南部特定土地地区画整備事業にかかわる埋蔵文化財発掘調査報告書一』。
- 芝田 悟 2004 「和同開珎銀銭の再検討」、松村恵司・栄原永遠男編『古代の銀と銀銭をめぐる史的検討』。
- 出土銭貨研究会 2000 『畿内・七道からみた古代銭貨』。
- 奈良県教育委員会 2000 『東大寺防災施設工事・発掘調査報告書 発掘調査篇』、東大寺。
- 奈良国立文化財研究所 1975 『平城京左京三條二坊』〔奈良国立文化財研究所学報第25冊〕。
- 奈良国立文化財研究所編 1976 『平城京左京八條三坊発掘調査概報 東市周辺東北地域の調査』、奈良県。
- 奈良国立文化財研究所 1982 『平城京右京二条二坊十六坪発掘調査概報』。
- 奈良国立文化財研究所 1983a 『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告』。
- 奈良国立文化財研究所 1983b 『平城京東堀河 左京九条三坊の発掘調査』。
- 奈良国立文化財研究所 1987 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』17。
- 奈良国立文化財研究所 1995 『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告 一長屋王邸・藤原麻呂邸の調査一』〔奈良国立文化財研究所学報第54冊〕。
- 奈良市教育委員会 1984 『平城京東市跡推定地の調査Ⅱ 第4次発掘調査概報』。
- 奈良文化財研究所 2004 『平城京出土古代官銭集成Ⅰ』。



〔黒川古文化研究所 1990〕 より抜粋

奈文研 139 次調査 (番号 6)



No. 0164

No. 0165

No. 0167

No. 0168

No. 0169

No. 0170



No. 0171

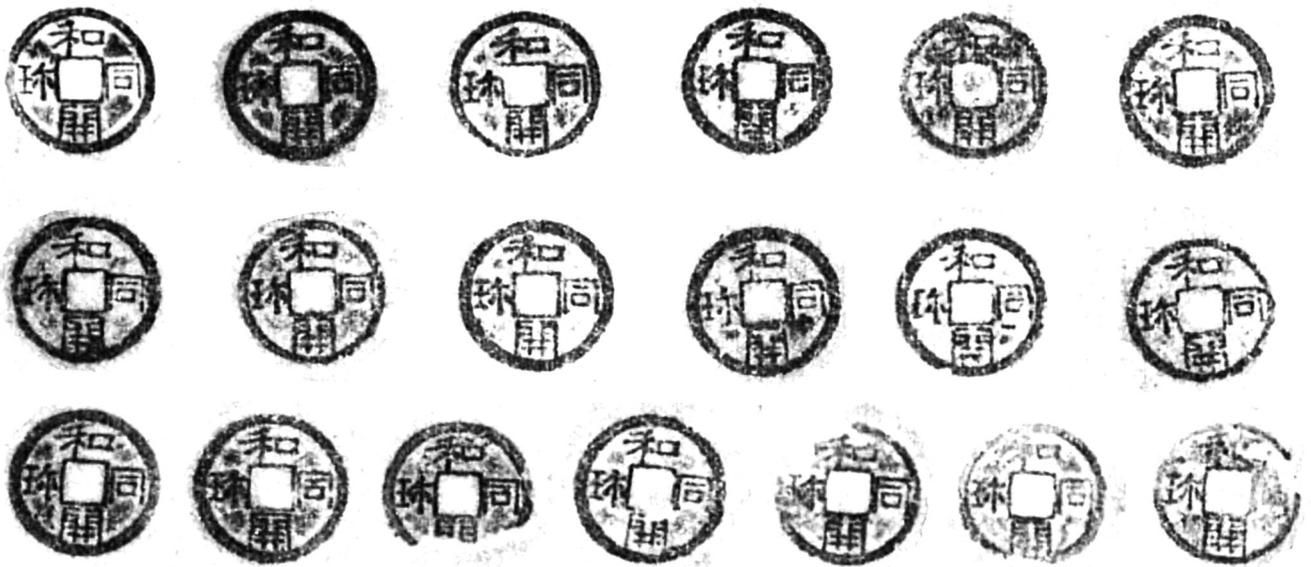
No. 0174

No. 0177

No. 0178

No. 0179

岸熊吉 1928 年調査 (番号 7)



奈文研 21 次調査 (番号 8)



No. 0001

No. 0002

No. 0003

図 1 - 1 東大溝 SD2700 出土和同開珎

奈文研 172 次調査 (番号 9)

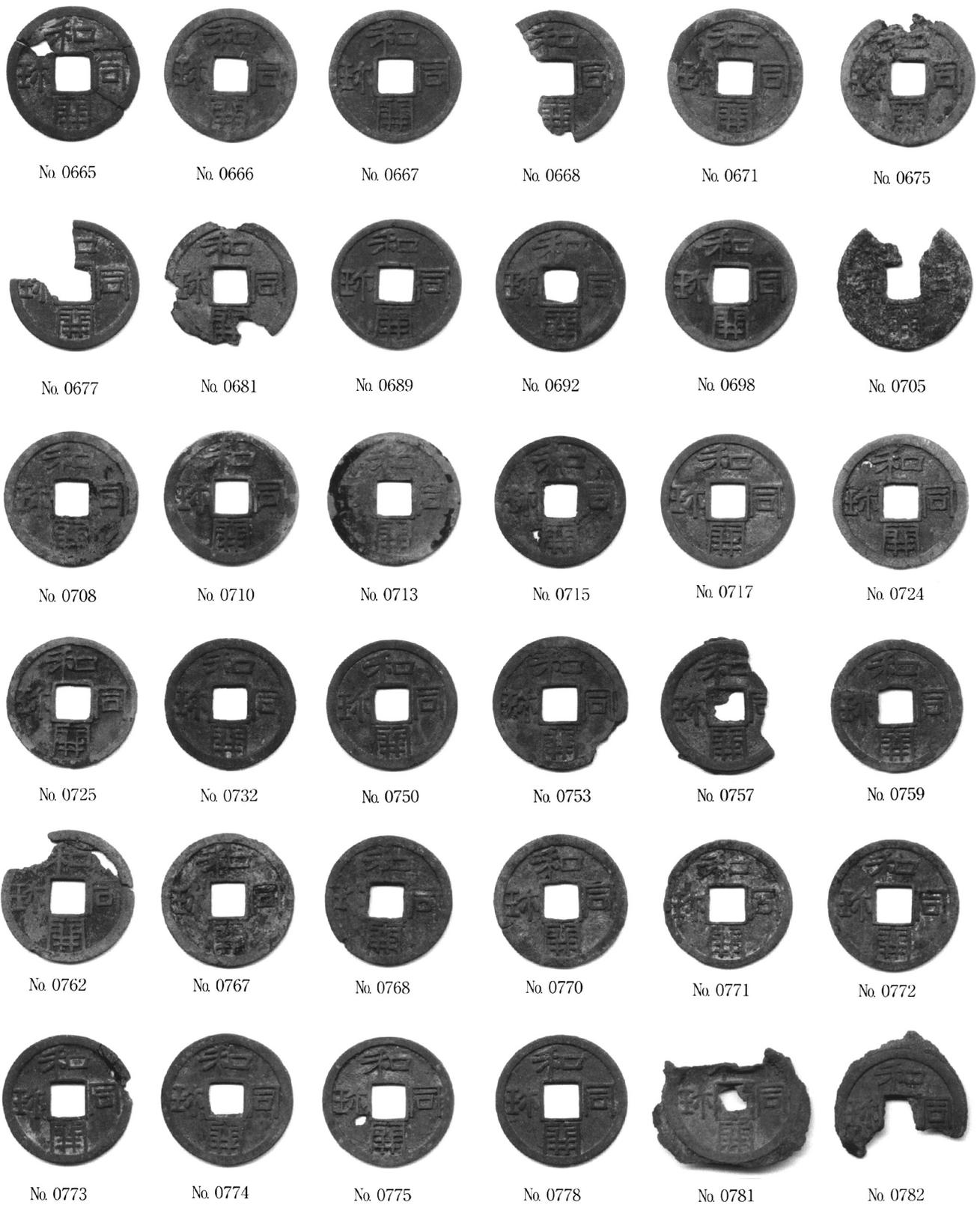
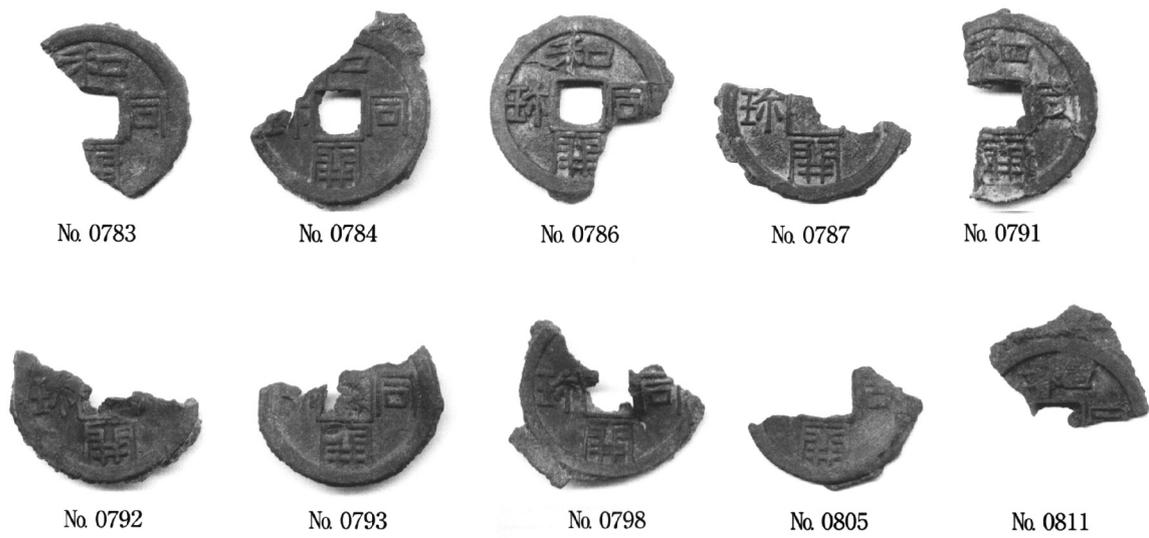


图 1 - 2 東大溝 SD2700 出土和同開珎



奈文研 154 次調査 (番号 10)



出典 番号 6・8～10 : 奈文研 2004  
番号 7 岸 1934

図 1 - 3 東大溝 SD2700 出土和同開珎

東堀河 左京八条三坊十一坪 (番号 103)

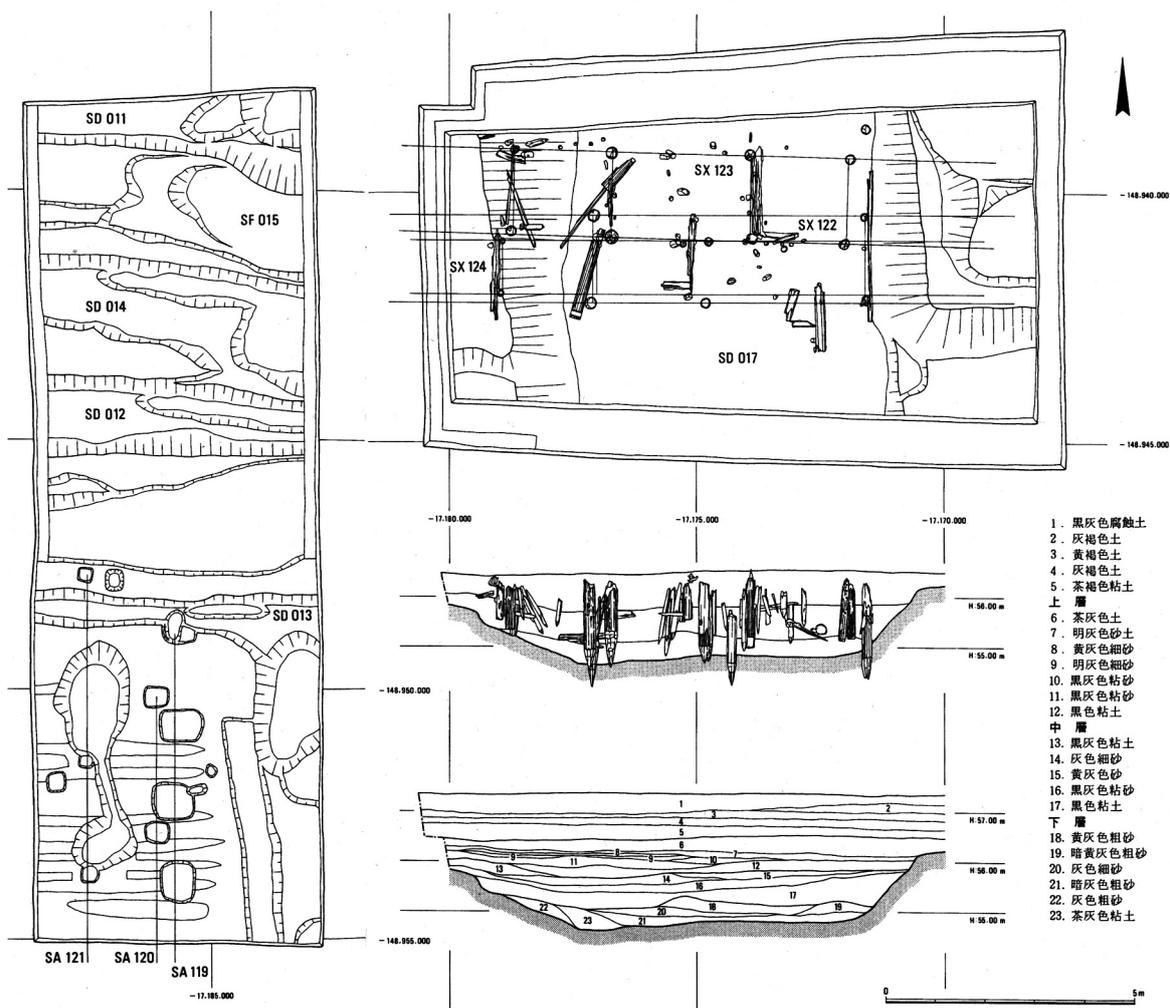


fig. 7 検出遺構平面図・立面図 1/100

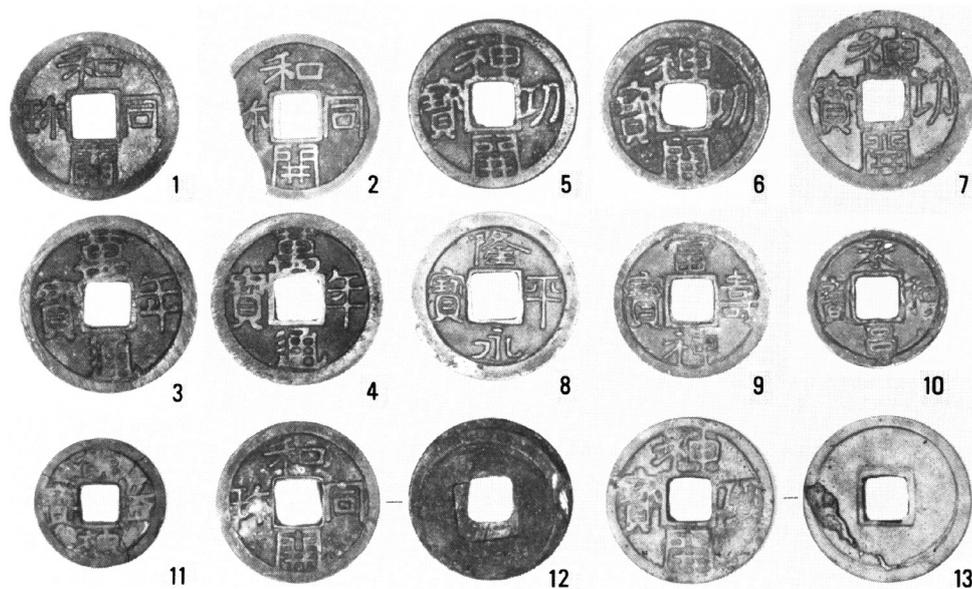
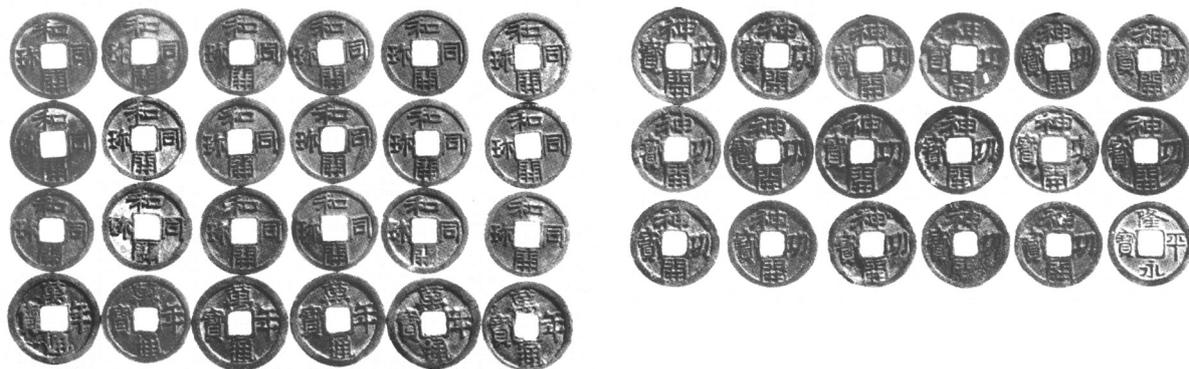
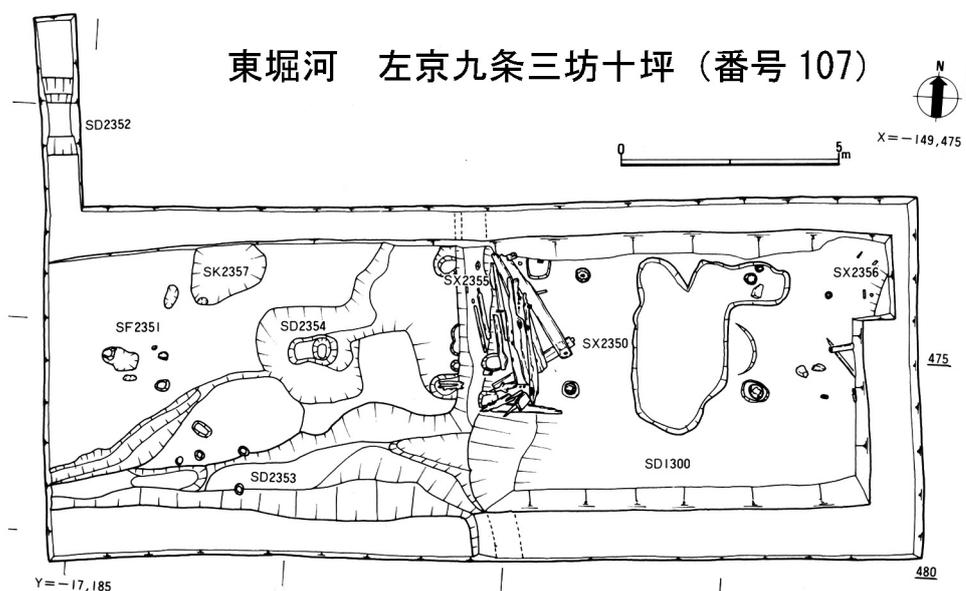


図 2 - 1 東堀河出土和同開珎

東堀河 左京八条三坊九坪（番号 105）



錢貨



出典 番号 103 : 奈良市教委 1984

番号 105 : 奈文研 1976

番号 107 : 奈文研 1983

図 2 - 2 東堀河出土和同開珎

# 左京三条二坊十五坪 SB970 出土和同開环 (番号 70)

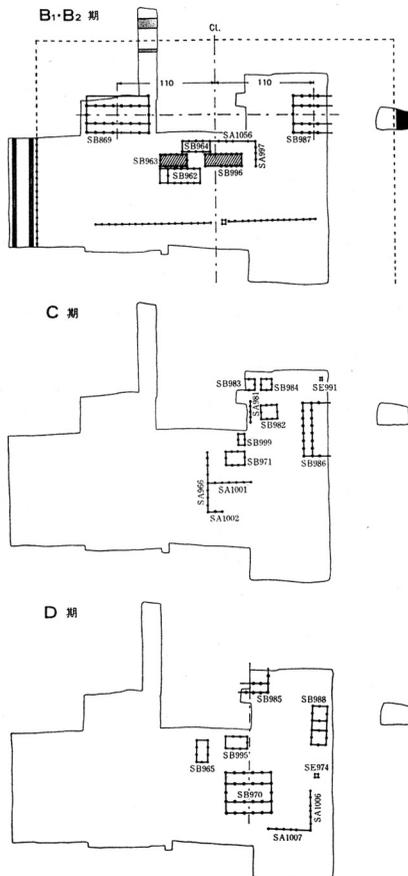
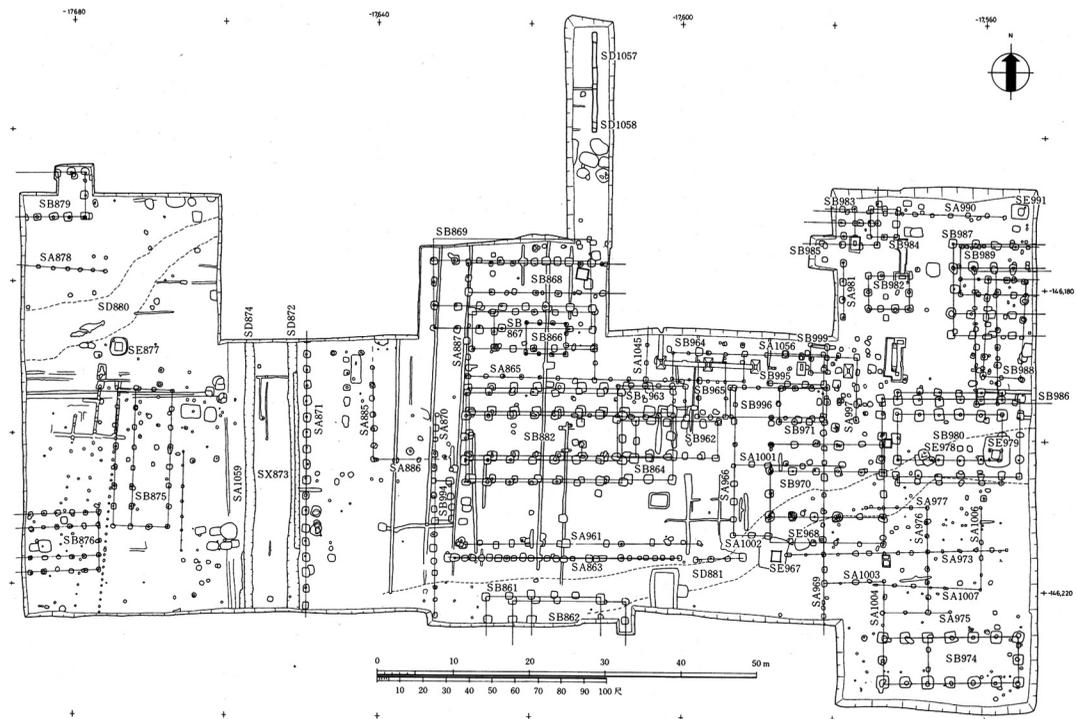


fig. 9 十五坪建物配置変遷図Ⅱ

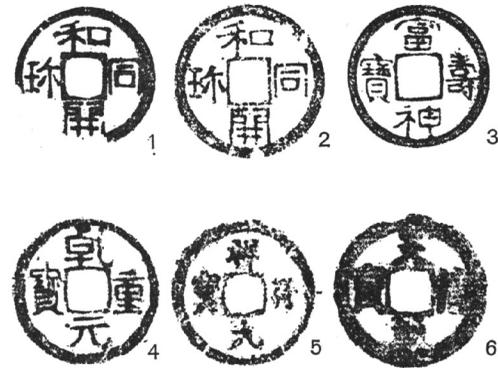


fig.21 銅錢拓本 1 : 1

No.	錢貨名	外縁径	内縁径	内郭 外寸	内郭 内寸	外縁厚	文字 面厚	重量	遺構
1.	和同開环	23.52	0.2	8.2	6.2	1.14	0.35	(2.023)	SB970 柱穴No. 1
2.	"	25.1	21.2	7.9	6.6	1.40	0.46	2.643	SB970 柱穴No. 8
3.	富寿神宝	23.4	19.6	8.0	6.2	1.54	0.43	3.169	SE979
4.	乾元重宝	24.2	20.5	8.0	6.8	1.13	0.70	1.922	
5.	祥符神宝	23.3	20.0	7.4	6.1	0.81	0.55	1.665	
6.	天禧通宝	25.4	19.9	8.4	6.4	0.93	0.62	2.637	

Tab.8 銅錢計測表 単位mm, g・平均数值

出典 奈文研 1975

## 図3-1 建物跡出土和同開环

左京四条四坊九坪 SB2390 出土和同開珎（番号 85）

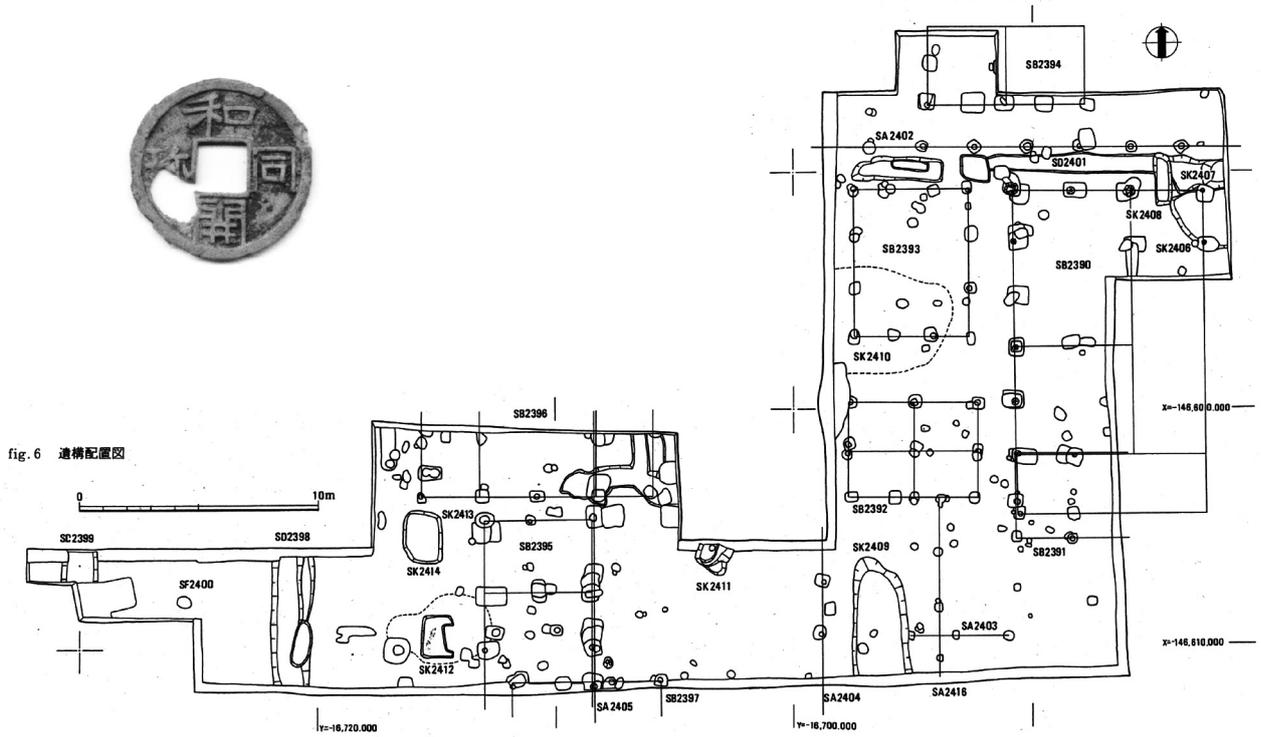
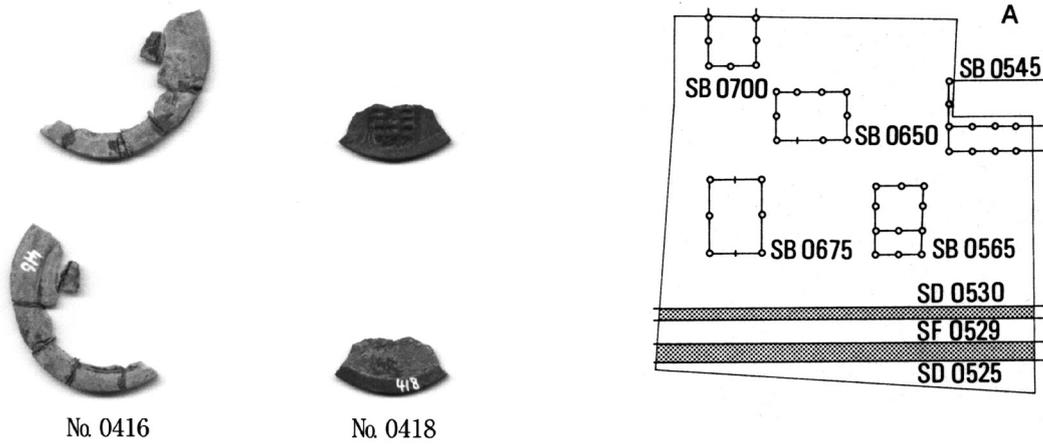


fig. 6 遺構配置図

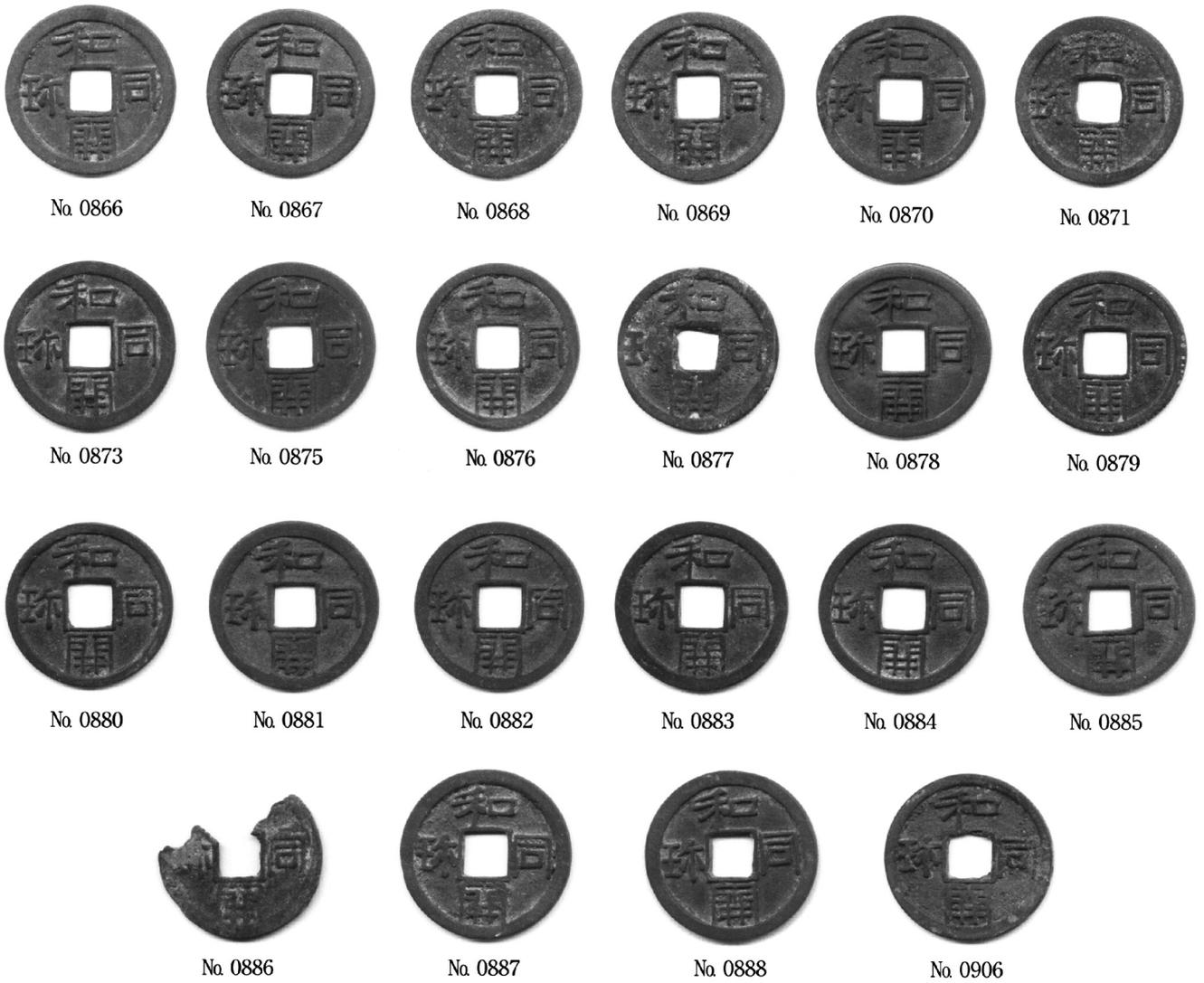
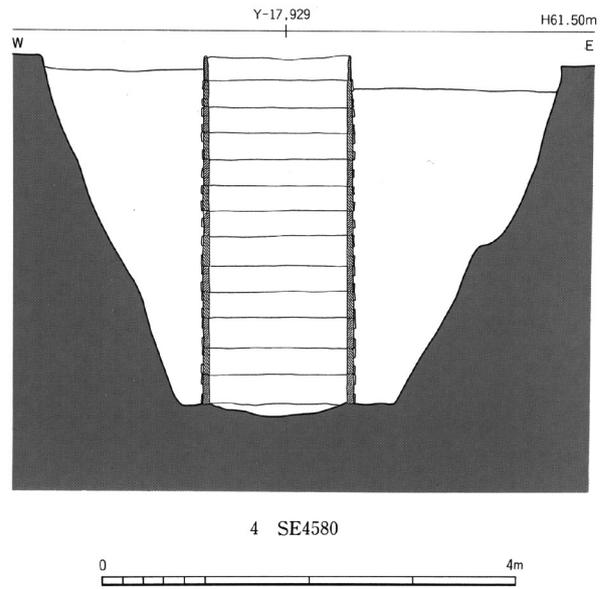
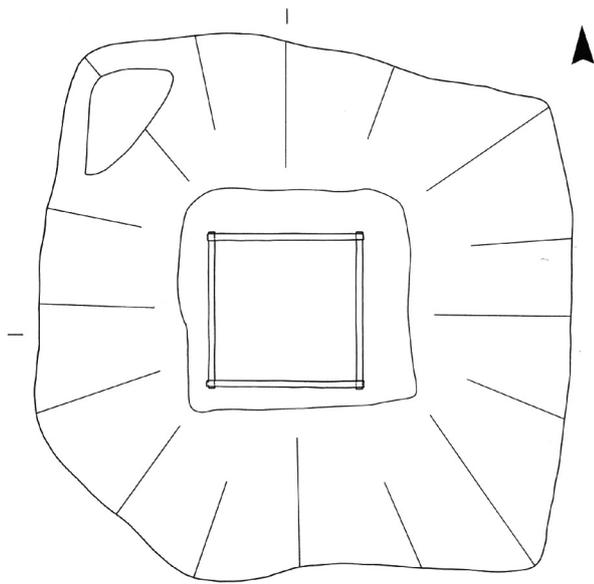
出典 奈文研 1983・2004

右京二条二坊十六坪 SB0545 出土和同開珎（番号 118）



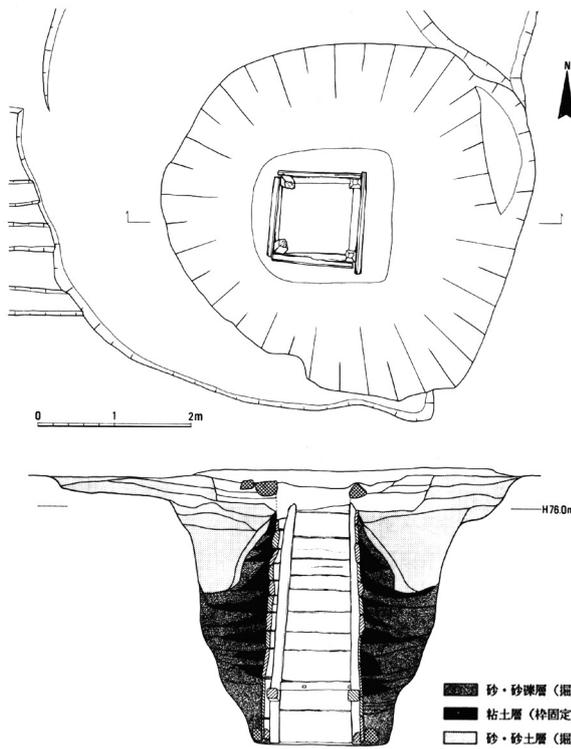
出典 奈文研 1982・2004

図 3 - 2 建物跡出土和同開珎



出典：奈文研 1995、奈文研 2004

図4 長屋王邸 SE4580 出土和同開珎



第8図 井戸SE4740平面・断面図(1:60)



写真9 左京六条三坊(47・50次)出土墨書土器

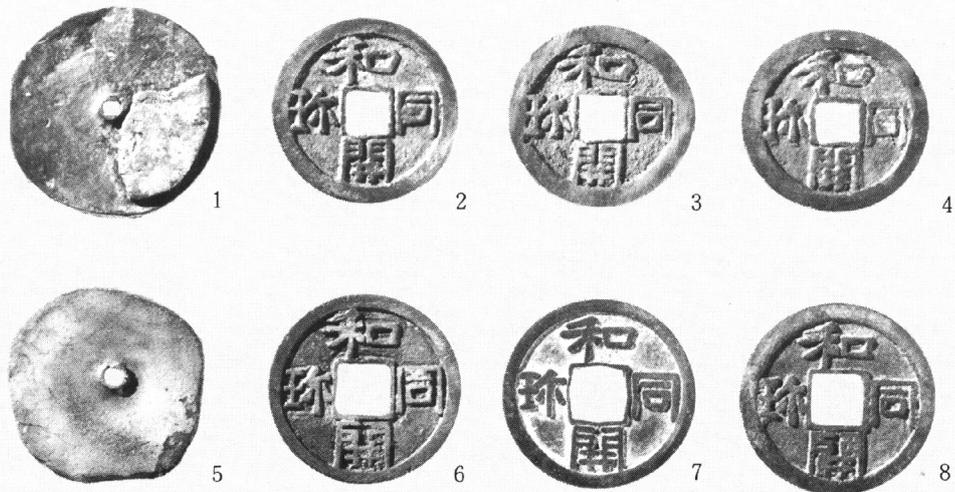


写真11 錢貨 1石神遺跡(6次)出土無文銀錢 2~4左京二条一・二坊(48次)出土和同銀錢  
5左京六条三坊(47次)出土無文銀錢 6~8左京六条三坊(47次)出土和同銅錢

出典 奈文研 1987

図5 藤原京左京六条三坊ほか出土錢貨

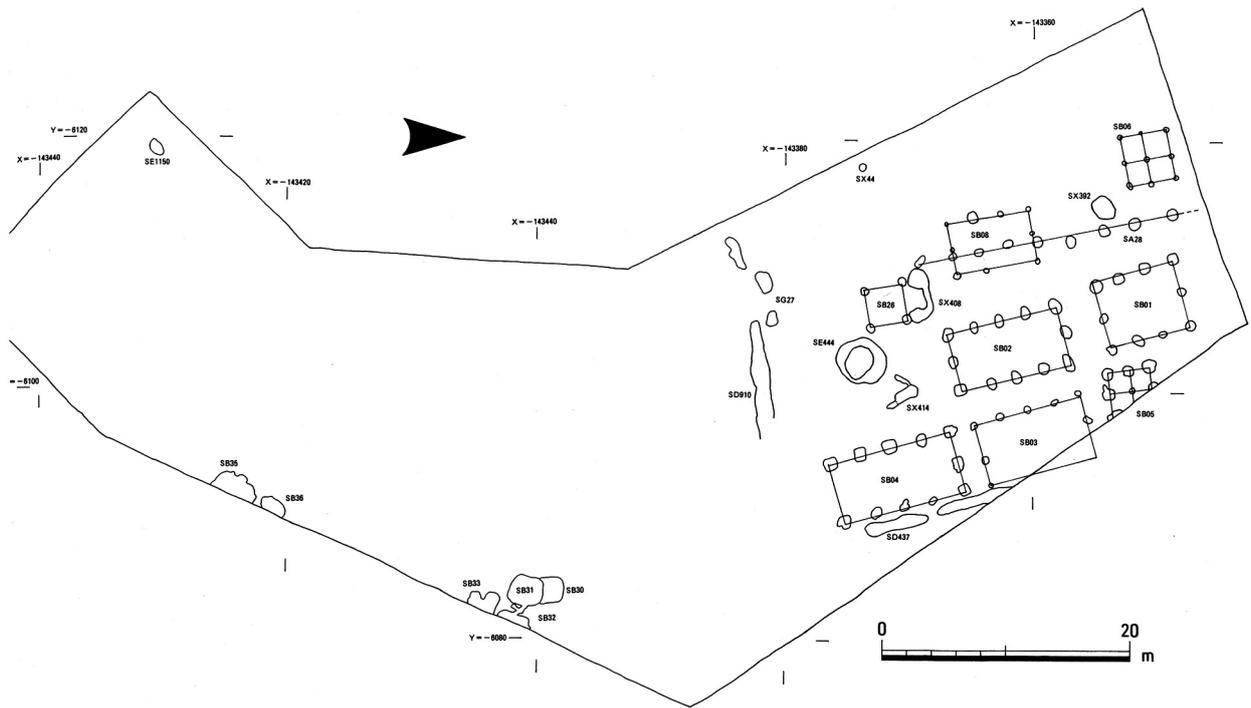
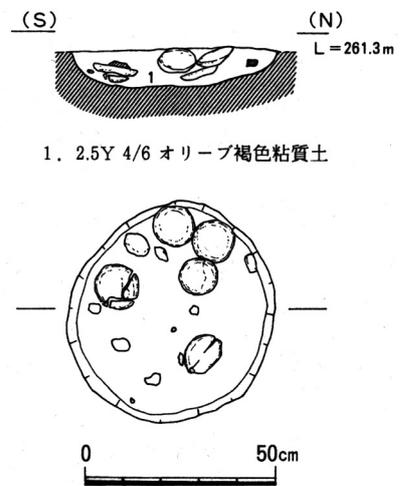


図4 大柳生ヒロタ遺跡 遺構変遷図Ⅰ(古墳時代~奈良時代)



SX44 遺物出土状況(東から)



出典：檀考研 1998

図6 大柳生ヒロタ遺跡 和同開珎出土遺構

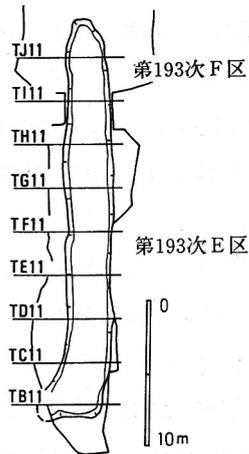
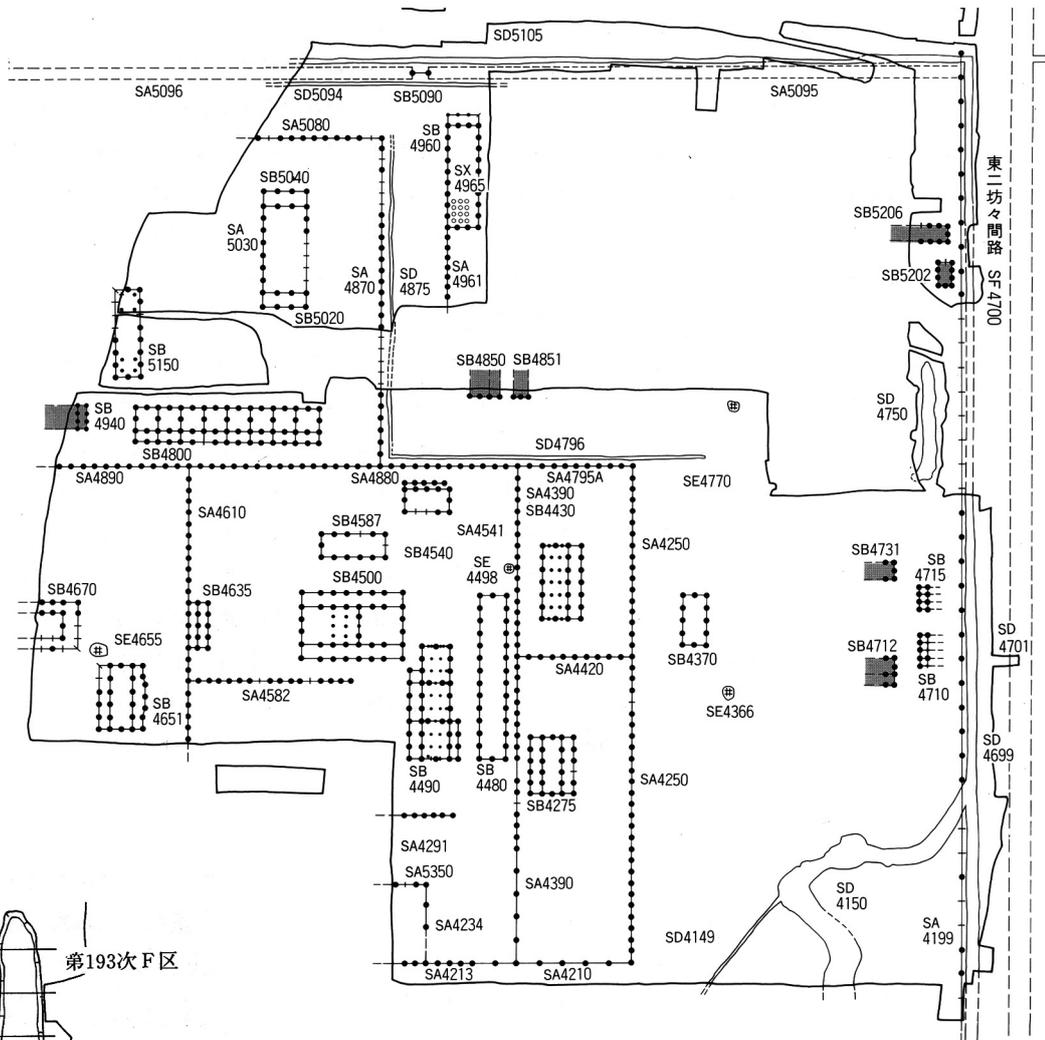


Fig. 49 SD4750地区割図

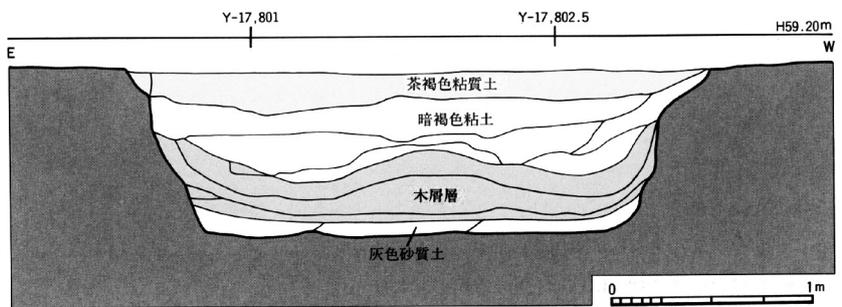


Fig. 34 SD4750土層図



No. 0895



No. 0896

(奈文研 1995, 奈文研 2004 より抜粋)

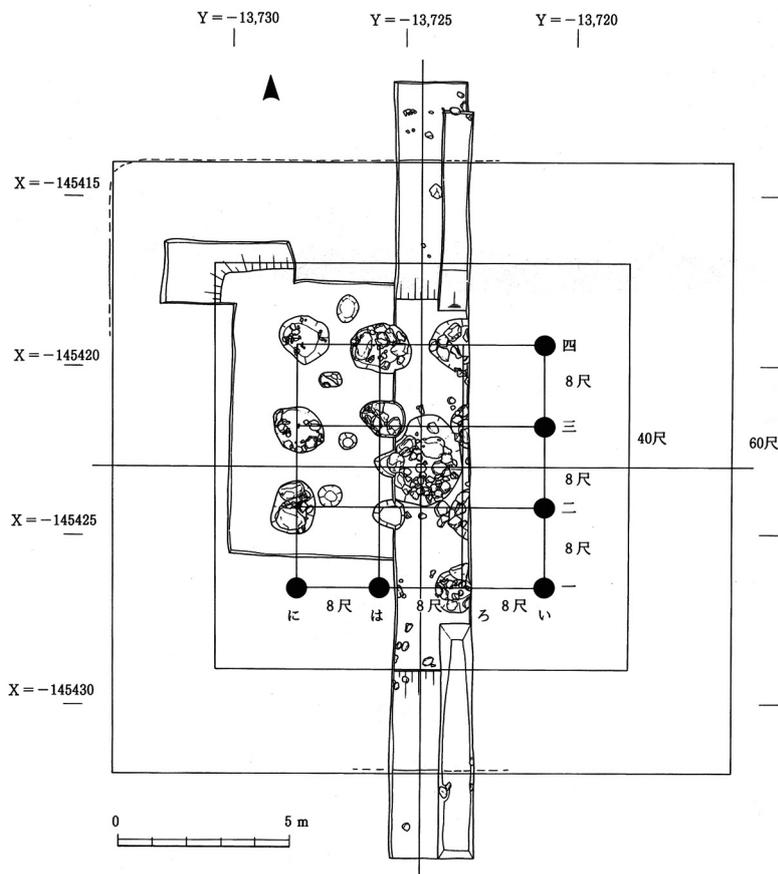


「暗褐色粘土」出土



「木屑層」出土

図7 長屋王邸 SD4750 出土和同開珎



1575

(奈良県教委編 2000 より抜粋)

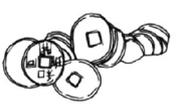
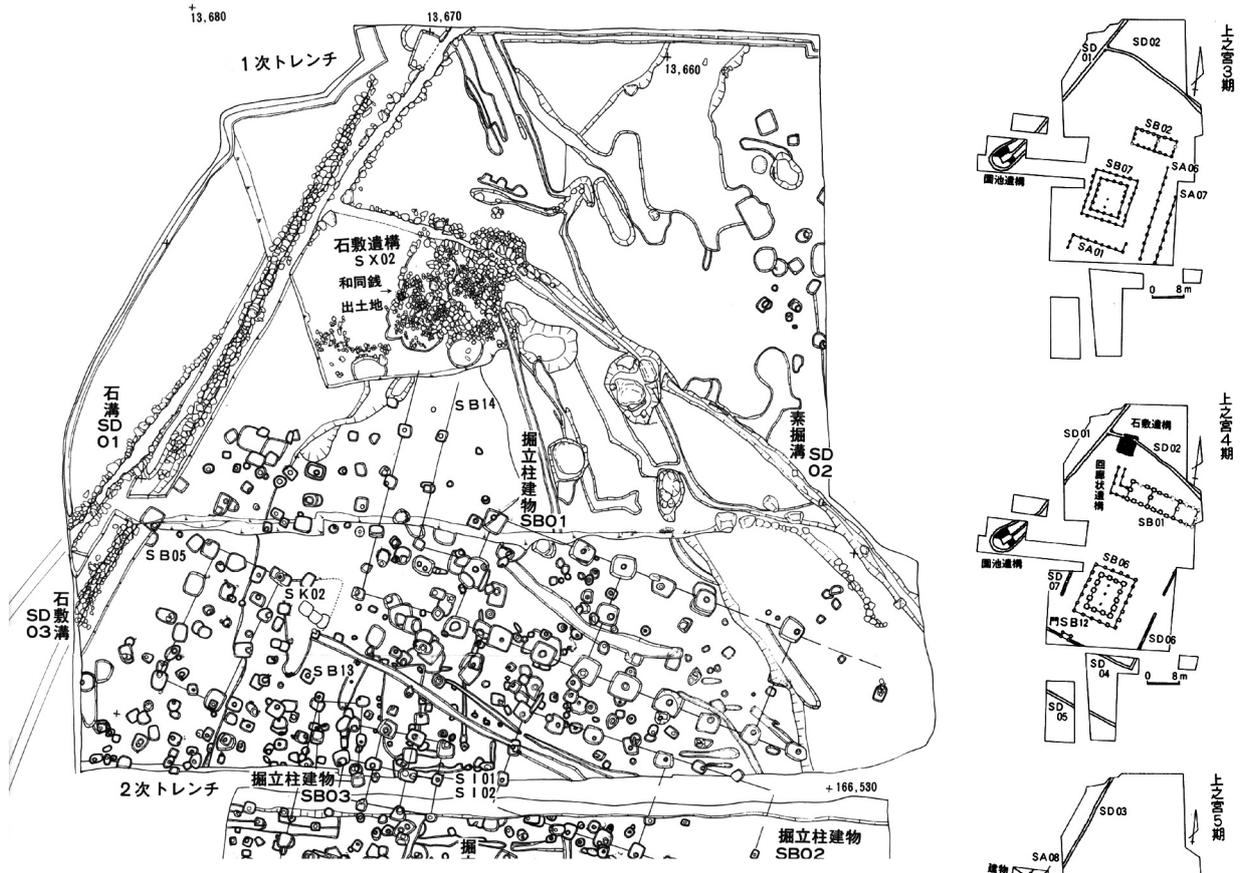
天地院地区 塔跡基壇復原図

一、天地院 号法蓮寺  
縁起文云。是文珠化身行基并建立也  
和泉國大鳥郡生。行基法師。本藥師。未年出家十五歲。年來之間學。滅後受一尊法。爲行  
者二年四十一。爲十方施主。建立諸國堂舍四十九箇所。并殖藥木。爲末世衆生也。於  
大和國。造八箇寺。第二。添上郡求諸山根。於御笠山安部氏社之北高山半中。始造。和  
銅元年二月十日戊寅。山峯一伽藍。即天地院。名法蓮寺。同二年三月十五日辛卯供養。  
請僧十人。導師經淵法師。大安寺咒願行聖法師。藥師寺唄善儀法師。元興寺散花田理法  
師。藥師寺六人法隆。大安。元興。藥師。僧固世也  
今加我山三笠伽藍共鎮守明神弘興佛法大紹出。此山本皇大之佛法相來集興見。其故  
顯所也。並犯見所事者定不成佛正覺矣。被與顯者生彌勒出世。成佛塵草木身。仍  
行基爲法界衆生。誓佛身願敬白  
天喜元年九月廿日未時。南面有五間檜皮齋堂等并佛像燒亡。并有北三間檜皮齋堂。同  
以燒失。但取出佛像。云貞觀十八年三月十一日僧世不羈施入田園。良弁僧正弟子文武天  
延曆十七年始行 此院八講第二以 八講第三 願應寺八講第四 也云云  
元四月四日行八講後改九月八日一時院主安久云云  
古老相傳云。去昌泰之比。延義講師勤天地院八講々師。而七大寺諸僧。莫非延義大  
德之弟子也。聽聞衆中雖勸論義諸人。弟子各々辭退無人論議。于時衆中有一老翁。  
鬢髮皓白。俄出衆中。先舉疑聲。爲三論議。其語巧妙其義甚深。衆人異之。延義大德  
牒論義一々答畢。爰老翁陳云。三論義中。一論義者。已成其答。一論義者未決也。  
一論義者令不成答。初果聖者智慧分齊頗爲佳耳。我是文珠也。語畢忽然不現。凡  
遇文珠一生中三度云云  
或日記云。和銅元年。行基并造天地院禮殿。此本堂不知建立之人云云。康平五年正月  
十六日。天地院金剛手并。始造安本堂了。  
天地院師資次第依古日記

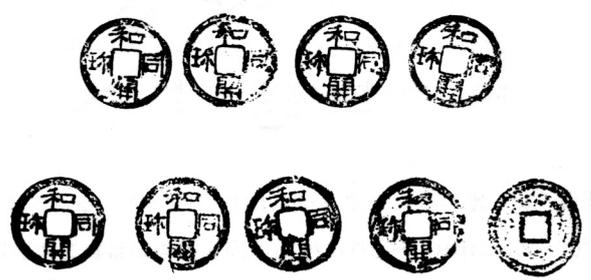
(後略)

『東大寺要録』卷第四 諸院章

図8 東大寺天地院出土と同開珎



L = 101.3m



4. 和同開珎出土状況・平・断面図

(桜井市教委 1989 より抜粋)

図9-1 上之宮遺跡出土和同開珎

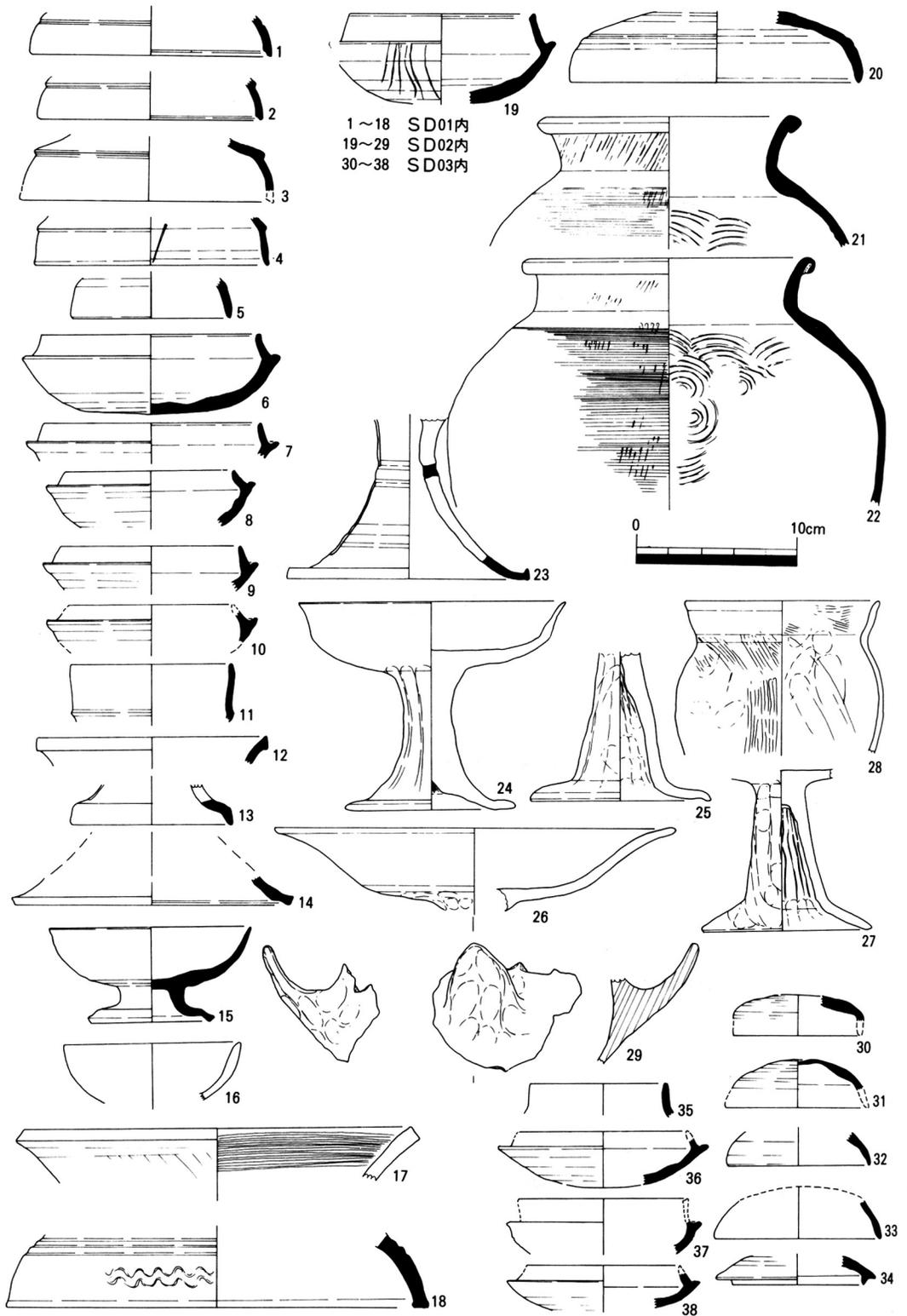
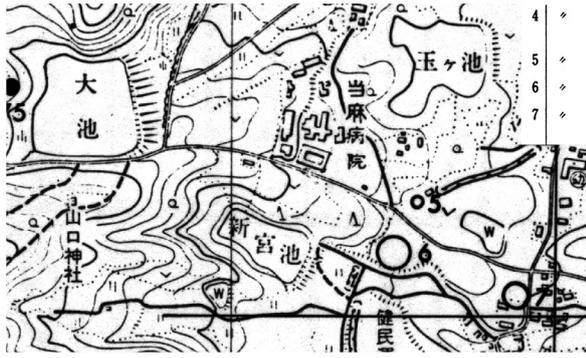


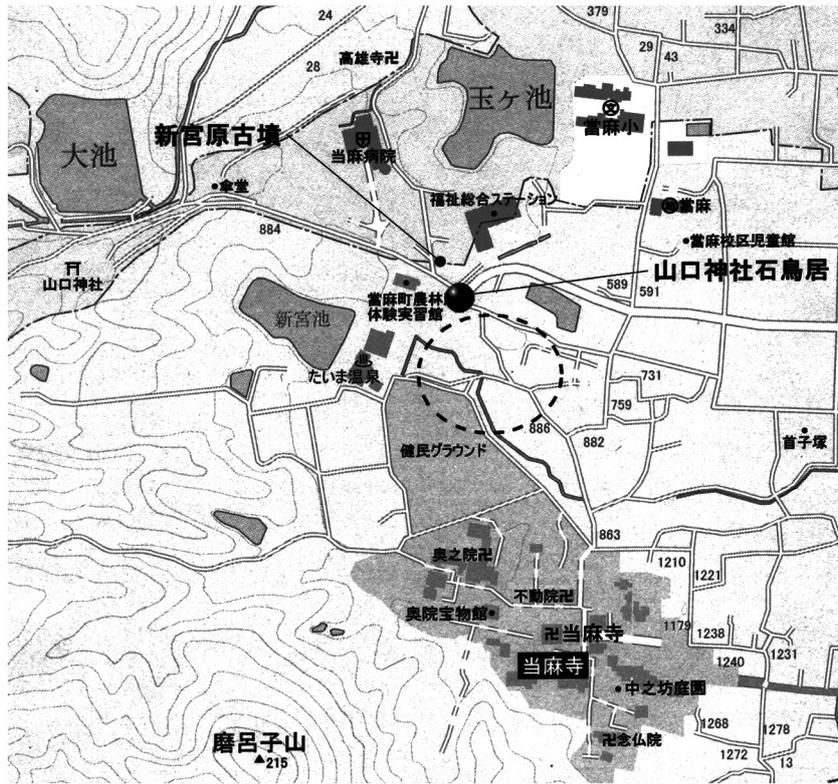
插图60 SD01~03出土遺物図

图9-2 上之宮遺跡溝出土土器



4	5	石光寺	寺院	奈良・前	壙瓦
5	6	新宮原古墳	古墳	古墳・後	須恵
6	7		古銭出土地	奈良	和銅銀銭
7	8		墳墓		石製威骨器
			当麻北墓共同墓地		
				組合式石棺	

『奈良県遺跡地図』（第2分冊改定）』



山口神社石鳥居の南斜面、岡本清重氏所有の開墾ぶどう畑から、和銅銀銭が出土した。開墾中に単独出土したものでその後のこの地点を踏査したが直接関係のあるものは見当らなかった。山辺郡都祁村の小治田朝臣安万侶の墓にも副葬されていたが、和銅銀銭の出土例は少ないから資料としては貴重なものである。銀銭は和銅開珎のほかに、天平宝字四年に金銭の開基勝室と同時に発行された太平元宝があるだけで、この実物は唐招提寺の校倉から一枚発見されたことがある。

和銅開珎の出土

（『當麻町史』）



石鳥居の東約5mより、南方の斜面を撮影



山口神社石鳥居（東側から撮影）

図 11 當麻町染野和同開珎銀銭出土地